HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語から見たゲルマン語(6) : 人称代名詞, 再帰代名詞, 所有代名詞
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 165, 31(左)-60(左)
Issue Date	2021-12-08
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.165.l31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83546
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_165_Shimizu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 165 （2021）

ドイツ語から見たゲルマン語（6）
── 3 人称代名詞，再帰代名詞，所有代名詞 ──

清　水　　誠

German as a Germanic Language (6)
— Anaphoric Pronouns, Reflexives and Possessives —
(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 165.
Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.
Sapporo/Japan. 2021. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1．3 人称代名詞と指示詞標識

1-1. 指示詞標識の系列[1]

3 人称代名詞に侵入した指示代名詞の目印には，語頭の指示詞標識 th/þ/d-

[1] 本研究は清水（2019）（2020）（2021a）（2021b）（2021c）の続編であり，科研費の助成による（ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述，基盤研究（C）（一般），19K00540）。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア：アイスランド語，ｱﾌ：アフリカーンス語，イ：イディッシュ語，印欧：印欧祖語，英：英語，オ：オランダ語，ギ：ギリシア語，ゲ：ゲルマン祖語，ゴ：ゴート語，古英：古英語，古高ド：古高ドイツ語，古ザ：古ザクセン語，古ノ：古ノルド語（＝古西ノルド語），古東ノ：古東ノルド語，古ﾌ：古フリジア語，ザ：（西）低地ドイツ語北低地ザクセン方言，ス：スウェーデン語，ﾁｭ：スイスドイツ語チューリヒ方言，デ：デンマーク語，ド：ドイツ語，西ﾌ：西フリジア語，ﾆｭ：ノルウェー語ニューノシュ

10.14943/bfhhs.165.l31

がある。ほかにも仲間があり，１つの言語に混在していることもある。

まず，(1) のゴート語の母音で始まる is/ita/eis/ijōs/ija（主格のみ）が挙げられる。ド er/es はその後裔（こうえい）である（英 it は古英 hit に由来する）。これを「母音系列」と呼ぶことにしよう。これは指示詞標識を欠くグループだが，本来，指示代名詞であり，ラテン語の指示代名詞 is/id/eī/eae/ea に対応する。そのルーツは印欧祖語の代名詞語幹 *ei-（基本階梯）/*i-（ゼロ階梯）（Krahe/Meid 1969[7]b: 56）であり，直示的機能もあった（Ramat 1981: 93）。つまり，現代語に見られる「３人称の代名詞は本来はなかった」（風間 1998: 101）のであり，日本語に似て，必要に応じて対象を明示していたと考えられている。古ゲルマン語からゴート語，古高ドイツ語，古ザクセン語の語形を例に取って，まとめてみよう（Krahe/Meid 1969[7]b: 55f.）[2]。

(1)　３人称：主格―対格―与格―属格

	ゴ	古高ド	古ザ
単数			
男性	is－ina－imma－is	er－in(an)－imu－sīn	hě/hǐ－ina－im(u)－is
女性	si－ija－izai－izōs	siu/sǐ－sia/sǐ－iru－ira	siu/sia－sia－iru－ira
中性	ita－ita－imma－is	iz－iz－imu－es	it－it－im(u)－is
複数			
男性	eis－ins－im－izē	sie－sie－im－iro	sia/sea－sia/sea－im－iro
女性	ijōs－ijōs－im－izō	sio－sio－im－iro	sia/sea－sia/sea－im－iro
中性	ija－ija－im－izē	siu－siu－im－iro	siu/sia/sea－siu/sia/sea－im－iro

次に，ゴート語の女性単数主格 ***s***i は，指示詞標識 s- を伴う「s-系列」に属する。ドイツ語では ***s***ie が該当し（英 she は語源不明，寺澤 1997: 1264），古

ク，ﾊﾘ：北フリジア語ハリゲン方言，ブ：ノルウェー語ブークモール，ﾌｪ：フェーロー語，ベ：スイスドイツ語ベルン方言，メ：(東) 低地ドイツ語メクレンブルク・フォーアポマーン方言，モ：北フリジア語モーリング方言，ル：ルクセンブルク語

[2] 古ゲルマン諸語の代名詞の語形には異形が多く，類書の記述には差がある。

高ドイツ語（***s***iu/***s***ĭ，***s***ia/***s***ĭ，***s***ie，***s***io，***s***iu）と古ザクセン語（***s***iu/***s***ia，***s***ia/***s***ea，***s***iu/***s***ia/***s***ea）の女性単数と複数主・対格もそうである。これは指示代名詞の男/女性単数主格（ゴ ***s***a/***s***ō，古ノ ***s***á/***s***ú，古英 ***s***ĕ/***s***ēo＜ゲ *sa/*sō＜印欧 *so/*sā）と同源である）[3]。

さらに，古ノルド語は，（2）に示すように「単数：h-系列」↔「複数：þ-系列」となっている。「h-系列」は代名詞 *hi-（＜ゲ *xĭ，Orell 2003: 172＜印欧 *ḱe）に由来する（Seebold 1984: 64-66）。「þ-系列」（＜ゲ *þa-＜印欧 *to-）は「th/d-系列」（英 ***th***ey/ド ***d***ie）の仲間である。フェーロー語は「t-系列」（t＜þ[θ]）なので，「th/þ/d/t-系列」と呼ぶことにしよう。古ノルド語をアイスランド語に含めてまとめると，次のようになる。

（2）	3人称	ア/（古ノ）主格—対格—与格—属格	ﾌｪ 主格—対格—与格—属格
単数	男性	hann－hann－honum[4]－hans	hann－hann－honum－hansara
	女性	hún（古ノ hon）－hana－henni－hennar	hon－hana－henni－hennara
	中性	það（古ノ þat）－það（古ノ þat）－því－þess	tað－tað－tí－tess
複数	男性	þeir－þá－þeim－þeirra（古ノ þeir（r）a）	teir－teir－teimum－teirra
	女性	þær－þær－þeim－þeirra（古ノ þeir（r）a）	tær－tær－teimum－teirra
	中性	þau－þau－þeim－þeirra（古ノ þeir（r）a）	tey－tey－teimum－teirra

これに疑問・不定代名詞の「h（w）-（＜wh-）[5]/（h/k）v/w-系列」（＜ゲ *hwa-＜印欧 *k^{w}o-）を加えれば（ド was/英（some）what 何～か？/何か，Krahe/Meid 1969[7]b: 74），日本語の「コソアド」に似た体系になる。副詞を含む例を挙げてみよう。

---

[3] 古ノ ***s***á/***s***ú/***þ***at はギ ὁ/ἡ/τό（***h***o/***h***ē/***t***ó 指示代名詞起源の定冠詞）にあたる（ギ h-/t- は古ノ s-/þ-/θ/ に対応する）。

[4] 古ノ honum/henni のほかに honom/henne の表記もある。

[5] 古英 hw-＞中英 w- からノルマン人の書記法によって，英 wh- のつづりになった。

(3)	母音系列	h-系列	th/þ/d/t-系列	s-系列	h(w)/(h/k)v/w-系列
英	it/Ø	he/here	that/they/there	Ø/Ø/Ø/so/such	what/where/how
ド	es/er	Ø/hier	das/die/da	sie/Ø/sich/so/solch	was/wo/wie
ア	Ø/Ø	hann/hér	það/þeir/þar	Ø/sá/sig/svo/slíkur	hwað/hvar/hve(rnig)
フェ	Ø/Ø	hann/her	tað/teir/Ø	Ø/Ø/seg/so, svá/slíkur	hvat/hvar/hvussu
ス	Ø/Ø	han/här	det/de/där	Ø/Ø/sig/så/Ø	vad/var/hur
ニュ	Ø/Ø	han/her	det/dei/der	Ø/Ø/seg/så/Ø	kva/kvar/kor(leis)

1-2. 大陸北ゲルマン語と英語の 3 人称代名詞― h-系列と th/d-系列

現代語での異なる系列の混在例を紹介しよう。まず，大陸北ゲルマン語の 4 言語を取り上げる。両性と中性に簡素化したデンマーク語，スウェーデン語，ブークモールは，単数で「有生・人間（＋ペットなどの動物）：h-系列」↔「無生・物事：d-系列」に分かれる。男・女・中性のニューノシュクは「男・女性：h-系列」↔「中性：d-系列」である。ただし，どれも複数は指示代名詞由来の「d-系列」に移行している。

(4)	主格―目的格	デ	ス	ブ	ニュ
単数：人間	男性	han ― ham	han ― honom	han ― ham/han	男性 han ― han/honom
	女性	hun ― hende	hon ― henne	hun ― henne	女性 ho ― ho/henne
物事	両性	den ― den	den ― den	den ― den	中性 det ― det
	中性	det ― det	den ― det	den ― det	
複数：		de ― dem	de/dom ― dem	de ― dem	dei ― dei
		[di̥] [d̥ɛm]	[dɔm:] [dɔm:]	[di:] [dɛm:]	

これに関連した有名な例が，英語の「th-系列」（***th***ey ― ***th***em ― ***th***eir(s)）である。古英語の時代にさかのぼって，古ノルド語と比べてみよう。

(5)		古英	主格―対格―与格―属格	古ノ	主格―対格―与格―属格
3人称単数	男性	hĕ― hine ― him ― his		hann ― hann ― honum ― hans	
	女性	hēo ― hīe ― hi(e)re ― hi(e)re		hon ― hana ― henni ― hennar	
	中性	hit ― hit ― him ― his		[þat ― þat ― því ― þess]	
複数	男性	hīe ― hīe ― him ― hi(e)ra		[þeir ― þá ― þeim ― þeir(r)a]	
	女性	hīe ― hīe ― him ― hi(e)ra		[þær ― þær ― þeim ― þeir(r)a]	
	中性	hīe ― hīe ― him ― hi(e)ra		[þau ― þau ― þeim ― þeir(r)a]	

古英語は「h-系列」のオンパレードと言える。英語の he はドイツ語の er の -r が脱落し，指示詞標識 h-（＜*hi）がついた語形である。一方，古ノルド語のカッコ内の語形は「th/þ/d/t-系列」の指示代名詞の侵入であり，人称代名詞の表に記載されないこともある（Krahe/Meid 1969[7]b: 55f., Prokosch 1939: 274）。一方，現代のアイスランド語では，3人称代名詞として定着している。この古ノルド語の語形がヴァイキング時代の12世紀以前にイングランド北部方言の主格に入り，近代英語が始まる1500年頃までに徐々に語頭音 h- の複数形をすべて駆逐して，th- で始まる複数形として定着した（宇賀治 2000: 174f.）。英 ***th***ey ― ***th***em ― ***th***eir(s) は古ノルド語の借用なのである。人称代名詞のような基礎語彙まで借用された事実は，言語接触の濃密さを物語っている。ただ，古英語の h- で始まる諸形が区別しづらかったことも，事実だったのだろう。

それにしても，か弱い e を補強するなら，古英 hĕ だけで十分だったはずである。それが3人称すべての語形に及んだのは，「類推」（analogy）の持つ力の賜物だった（Krahe/Meid 1969[7]b: 57）。実際，（1）の古ザクセン語では，h- の侵入は単数主格 hĕ/hĭ のみである。英語の ***h***e ― she ― it と並んで，西フリジア語は ***h***y ― ***h***ja[ja]（＜古フ ***h***iu）― it/sy（オ zij の借用）となる。一方，北海ゲルマン語の影響を受けたオランダ語は ***h***ij ― zij ― het[ət]（＜中オ 't, h- は人為的添え物，Donaldson 1983: 163），ドイツ語は er ― sie ― es である。北海ゲルマン語の後裔（こうえい）では3人称代名詞に「h-系列」が残り，内陸ゲルマン語では「母音系列」が支配的と言える（清水 2021c: 21，**図表 1** 参照）。

1-3. フリジア語群の 3 人称代名詞―弱形と統語的接語

古ノルド語起源の英 them に乗っ取られる以前の「h-系列」は，じつは現代英語にも h- を欠く弱形 'em[əm]として，話し言葉で受け継がれている（英 I know ***them/'em*** well.）[6]。1480 年頃の後期中英語では，them（＜古ノ þeim）と hem（＜古英 him）が併存していた（Lass 2006: 75）。

さて，冠詞にも認められる「基本形―弱形」の併存を人称代名詞に体系化しているのが，フリジア語群である。次に示す（6）は，北フリジア語モーリング方言の例である（me/de/et の e は[ə]）。3 人称の j- で始まる語形は，（9）に示すように，古フリジア語の hi- にさかのぼる（女性単数主格 jü（＜古フ hiu），複数主格 ja（＜古フ hia），複数目的格 ja/jam（＜古フ him(man)/hiam）。2 人称複数主・目的格 jam は，古フ ji（主格）/jemma(n)（対・与格）に対応する（Sjölin 1969: 34）。

(6) モ		単数：主格	目的格	複数：主格	目的格
1 人称		ik ― 'k	me ― Ø	we ― Ø	üs ― Ø
2 人称		dü ― Ø	de ― Ø	jam ― 'm	jam ― 'm
3 人称	男性	hi ― 'r	ham ― 'n	3 人称 ja ― 's	ja/jam ― 's
	女性	jü ― 's	har ― 's		
	中性 無生	et/dåt ― et/'t	et/dåt ― 't/et（再帰 ham ― Ø）		
	有生	et/hat ― et/'t	ham/et ― 't/et[7]（再帰 ham ― Ø）		

弱形は直前のホストを必要とする前接語である。ik ― 'k，jam ― 'm，dåt ― et/'t，hat ― et/'t は，強弱の差による「音韻的接語」（phonological clitic）を含む「基本形―弱形」のペアである。

一方，3 人称代名詞を中心とするその他のペアは，語形に根本的な差が認

[6] アイスランド語にも単数男性対格 hann/与格 honum（英 him）に対して，正書法に反映されない非公式の弱形 'ann/'onum がある（Thráinsson 2007: 5）。

[7] Walker/Sjölin（1986: L 11.3）の表には，目的格 ham の弱形として 'n が記載されている。モーリング方言の人称代名詞の記述には，類書によって微妙な差がある。

められる（モ 主格：hi ― 'r，jü ― 's，ja ― 's；目的格：ham ― 'n，har ― 's，ham ― 't，ja/jam ― 's）。異なる語幹が混在して，語形変化を形成する現象を「補充法」（suppletion）と言う。使用頻度が高く，類推が及びにくい語によく見られ，英 be 動詞に相当する語が好例で，英 go の過去形 went も wend「行く」（＜古英 wendan 転じる（ド wenden））の過去形の転用である。補充法による上記の弱形は統語的に制限され，主文定動詞と補文導入要素（従属接続詞，間接疑問文の疑問詞，関係詞）の直後でしか使えない。英語を除く大部分のゲルマン諸語の文構造は「枠構造」が基本であり，この両者の占める位置を「左枠」（ド linke Klammer）と言う。その直後に寄り添う代名詞などの無強勢の機能語が占める位置を「ヴァカーナーゲル位置」（Wackernagel-position）と呼んでいる。上記の 3 人称代名詞を中心とする弱形は，（7）に示すように，そこでしか使えない「統語的接語」（syntactic clitic）なのである。一方，基本形は強勢を持てば，（8）のようにどの位置でも使うことができる（用例は清水（1992: 101f.），Petersen（2007: 174–177），Walker/Sjölin（1986: L11.2–Ü11））。

（7） モ ***Hi*** kamt gliks. 彼は（hi）すぐに（gliks）来ます（kamt）

↔Kamt***'r*** lääser? 彼は（'r）後で（lääser）来ますか（kamt 主文定動詞）

Ik liiw ai, dåt***'r*** kamt. 私は（ik）彼が（'r）来る（kamt）とは（dåt 従属接続詞）思いません（liiw ai）

モ ***Jü*** seet dåt bjarn aw en stölj. 彼女は（jü）その子供を（dåt bjarn）いすに（aw en stölj）すわらせます（seet 主文定動詞）

↔Koon***'s*** ai luupe? 彼女は（'s）歩く（luupe）ことができないのですか（koon 主文定動詞～ai）

Ik wiitj ai, weer***'s*** booget. 彼女が（'s）どこに（weer 間接疑問文の疑問詞）住んでいるか（booget）私は（ik）知りません（wiitj ai）

（8） モ {Heet***'r's***/Heet ***hi's***} ål hååld? 彼は（'r/強勢あり hi）彼（女）（ら）

を（'s）もう（ål）迎えに行ったのですか（heet～hååld）
Heet ***hi*** unti ***jü*** dåt schraawen?　彼（hi 強勢あり）それとも（unti）彼女が（強勢あり jü）それを（dåt）書いたのですか（heet～schraawen）

（6）の 3 人称代名詞にさらに注目しよう。主格の「男性単数：基本形 hi ―弱形 'r」は「英 he ―ド er」に対応する。基本形 hi-***Ø***（英 he-***Ø***）は由緒正しく北海ゲルマン語的な語形だが，弱形 'r（ド er）はいかにも内陸ゲルマン語的である。同じく主格の「女性単数 jü（＜古フ hiu）― 's」は「(5) 古英 hēo ―(1) 古高ド siu/sī（＞ド sie）」に対応しており，「複数 ja（＜古フ hia）― 's」は「古英 hīe (5) ―古高ド sio (1)（＞ド sie）」に対応している。このように，北フリジア語モーリング方言の主格では，「基本形：h-系列」↔「弱形：s-系列」が併存していることがわかる。

一方，目的格では，「男性単数 ha***m*** ― '***n***」（ド 与格 ih***m*** ―対格 ih***n***），「女性単数 ha***r*** ― '***s***」（ド 与格 ih***r*** ―対格 ***s***ie），「複数 ja/ja***m***（＜古フ hi***m***（man）/hia***m***）― '***s***」（英 与格由来 the***m*** ―ド 対格 ***s***ie）のように，「基本形：与格 -m/-r」↔「弱形：対格 -n/s-」という異なる格形が競合している。英語では，3 人称中性単数（i***t***（tha***t***/wha***t***））を除いて，対格形は与格（hi***m***/he***r***/the***m***（who***m***））の前に姿を消した[8]。それが弱形に残っているのである。モーリング方言の「基本形―弱形」は，英語の与格のペア（them ― 'em）よりも多様なハイブリッド代名詞の複合体であると言える。(9) に挙げる古フリジア語の 3 人称の語形（Sjölin 1969: 34f. 変更）から，このことを確認してみよう。

(9)　古フ 単数：主格	対格	与格	属格
単数 男性　hi ―-re/-(e)r	hine/en(e)―-ne	him ―-em	sin ―-(e)s

[8] イングランド南西部デヴォン州（英 Devon），南デヴォン地方（英 South Devon）の方言のように，男性単数目的格の弱形に古英語の対格 hine に由来する un を残す例もある（Trudgill 1999[2] 97f.）。

	女性	hiu ―-se/-s	hia ―-s(e)	hire/her ― Ø	hire/her(a) ― Ø
	中性	hit/het ―-(e)t	hit/het ―-(e)t	him ―-em	sin ―-(e)s
複数		hia ―-s(e)	hia ―-s(e)	him(man)/hiam ― Ø	hi(a)ra ― Ø

（6）のモーリング方言はこのパターンを受け継いでいることがわかる。同様の分布は，他の北フリジア語諸方言（Wilts 1993: 20, 1995a: 23, 1995b: 21, 1995c: 20, 1995e: 24f., 1997: 21, Borchert et al. 1987: 90f.），西フリジア語（清水 2006: 149, Tiersma 1999[2]: 59），ザーターフリジア語（東フリジア語 Kramer 1982: 21）とも共通している。ただし，その由来はよくわからない（Boutkan 2001: 623）。Seebold（1984: 60）は，他の古ゲルマン諸語の弱形と合わせて古い時代からあったが，書き言葉としては認められず，文字表記されなかったために伝承されなかったと推測している。しかし，確証はなく，後代の発達かもしれない。

1-4. アフリカーンス語の人称代名詞―弱形の欠如と統一複数

これに対して，アフリカーンス語の代名詞には弱形がない。人称代名詞は無強勢で発音することが多いが，語形的に目立った相違はないのである。オランダ語には，次に示す「基本形―弱形」のペアがあり，基本形のつづりで書いても，日常会話では強調する場合を除いて，弱形で発音するのが普通である（オランダ語のカッコ内の ie/'m/(d)'r の表記は，非公式の文章や慣用句に限られる）。

(10)	単数	アフ 主格	目的格	↔ オ 主格	目的格
1人称		ek[ɛk][9]	my[məi]	↔ ik[ɪk]―'k[k]	mij[mɛi]―me[mə]
2人称	親称	jy[jəi]	jou[jœu]	↔ jij[jɛi]―je[jə]	jou[jɔu]―je[jə]
3人称	男性	hy[ɦəi]	hom[ɦɔm]	↔ hij[hɛi]―(ie[i·])	hem[hɛm]―('m[əm])

[9] 強調形 アフ ek***k***e['ɛkə]/オ ikk***e***['ɪkə]もあり，アフ Ekk***e***?「私なの？」/オ Ikk***e***!「私だよ」のように単独で使う（西フ ikk***e***['ɪkə]/古高ド ihh***a***（＜印欧 *eǵō）参照）。

女性	sy[səi]	haar[ɦɑːr]	↔ zij[zɛi]－ze[zə]	haar[haːr]－ze[zə]/((d)'r[(d)ər])
中性	dit[dət]	dit[dət]	↔ Ø－het/'t[(ə)t]	Ø－het/'t[(ə)t]
複数	ｱﾌ 主格	目的格	↔ オ 主格	目的格
1人称	ons[ɔ̃ːs]	ons[ɔ̃ːs]	↔ wij[ʋɛi]－we[ʋə]	ons[ɔns]－Ø
2人称	julle['jœlə]	julle['jœlə]	↔ jullie['jʏli·]－je[jə]	jullie['jʏli·]－je[jə]
3人称	hulle['ɦœlə]	hulle['ɦœlə]	↔ zij[zɛi]－ze[zə]	hun[hʏn]/hen[hɛn]－ze[zə]
単複				
2人称敬称	u[y]	u[y]	↔ u[y·]－Ø	u[y·]－Ø

所有代名詞も同様である。オランダ語で「基本形―弱形」の区別があるものに限って，次に両言語を対比して示す。

(11) ｱﾌ my[məi] 私の　jou[jœu] 君の　sy[səi] 彼・それの
haar[ɦɑːr] 彼女の　jul(le)['jœl(ə)] 君たちの
オ mijn[mɛin]― m'n[mən] 私の　jouw[jɔu]― je[jə] 君の
zijn[zɛin]― z'n[zən] 彼・それの　haar[haːr]―(d)'r[(d)ər] 彼女の　jullie['jʏli·]― je[jə] 君たちの

このように，アフリカーンス語では，オランダ語に見られる弱形が駆逐されていることがわかる[10]。一般にオランダ語の無強勢母音は，あいまい母音 e[ə]に弱化する。この傾向はアフリカーンス語にも認められる。ただし，アフリカーンス語の二重母音 y/ei[əi]は無強勢ではない（ｱﾌ wy[vəi]私たち/wei[vəi]牧場 /eie['əiə]独自 の↔オ wij[ʋɛi]/weide['ʋɛidə]/eigen['ɛiɣə(n)]）。注意を要するのは，アフリカーンス語では，母音で終わる開音節と語末の無強勢あいまい母音 e[ə]が「完全母音」（full vowel）に強まることが

[10] 弱形の唯一の残存は「se 構文」（ｱﾌ Jan ***se***[sə]hoed ヤンの帽子，オ Jan ***z'n***[zən]hoed, 7–3–4 参照）の se[sə]である（Ponelis 1993: 196）。不定冠詞：ｱﾌ 'n[ə]（オ een[ən]/英 a(n)）は数詞：ｱﾌ een[eːn, eən]「1」（オ één[eːn]/英 one）との区別を示す。

ある点である。①指小辞 -tjie[ci]（オ -(t)je[cə(jə)）による指小形：アフ hond***jie***['ɦɔiŋci]子犬←hond[ɦɔnt]犬（オ hond***je***['hɔncə]←hond[hɔnt]），②定冠詞：アフ die[di]（オ de[də]↔指示代名詞 die[di·]），③副詞/R-代名詞：アフ daar そこ/それ，例　アフ daar(～)in その中で（オ er[ər]↔daar[da:r]）はその例である。個々の語彙では，アフ bagas***ie***[bə'xɑ:si]「手荷物」/weduw***ee***['ve:dəve:]「未亡人」（オ bagag***e***[ba·'ɣa·ʒə]/weduw***e***['ʋe·dy·və]）などがあり，アフ skaduw***ee***/tomat***ie***/padd***a*** 「影/トマト/ヒキガエル」は，古くは語末音 -e[ə]を伴っていたオ schaduw/tomaat/pad（＜schaduw***e***/tomat***e***/padd***e***）に対応する。

このことから，（10）アフ dit ―オ het/'t「それ」の対応も説明できる。つまり，アフ dit[dɨt]「それ」は近接指示詞：オ dit[dɪt]「これ」（ド dieses）には由来せず，オ het/'t[(ə)t]「それ」（ド es）に対する指示代名詞：オ dat[dɑt]「それ，あれ」（ド das）の a[ɑ]があいまい母音[ə]に弱まり，アフリカーンス語特有の[i]＜[ə]という発音の明確化を経て，dit[dɨt]になったと考えられる（Ponelis 1993: 212, Howe 1996: 230f.）。

アフリカーンス語のこの傾向は，ゲルマン語として特異である。印欧祖語から分岐したゲルマン祖語は，強勢（強さアクセント stress（accent））による「語頭アクセント」（initial accent）への固定以降，無強勢音節で完全母音の素性が中和してあいまい母音[ə]に弱まり，脱落するプロセスを経てきたからである（例．ド hilft/macht（彼は）助ける/作る＜中高ド hilf***e***t/mach***e***t, e/ə/＜古高ド（er）hilf***i***t/mach***ō***t）。したがって，このアフリカーンス語の発達は，言語内の構造的要因による通常の音韻変化ではないと言える。

アフリカーンス語学の権威ライト女史（Edith H. Raidt）は，アフリカーンス語には個々の語を明確に発音するという特徴があり，代名詞弱形の駆逐をその好例に挙げている。そのルーツは，17 世紀半ば以降，ケープタウン入植者（オランダ人は 36.8%のみ，Vekeman/Ecke 1992: 223）に現地人を交えた人々の接触によるオランダ語の習得過程に求められるという（Raidt 1983: 96f.）。一般に代名詞の弱形の消失は，混成言語の初期段階である「ピジン言語」（pidgin）の最初の過程で起こるという説もある（Howe 1996: 233）。「半

クレオール言語」(semi-creole) とみなされることの多いアフリカーンス語には，言語接触による特異性が随所で認められるようである。

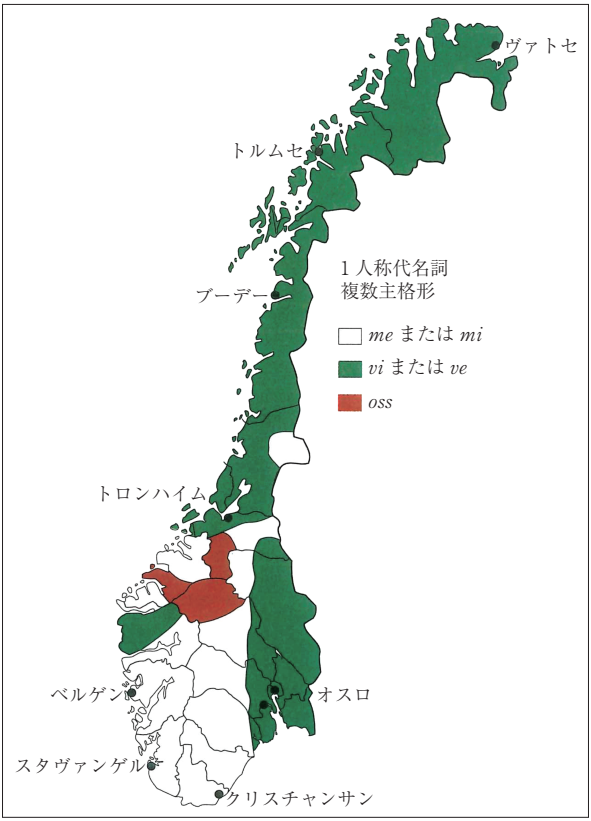
アフリカーンス語人称代名詞の第 2 の特徴は，複数形が所有代名詞を含めて同形で，すべての統語的機能を満たす点である。一般に複数では，語形変化が平均化する「統一複数」の傾向が認められる。アフリカーンス語の人称代名詞はその好例と言える (ア ***Ons*** kwyt ***ons*** goed van ***ons*** taak. 我々は (ons 人称代名詞主格) 我々の任務を (van ons taak 所有代名詞) うまく (goed) やり遂げる (kwyt ons 人称代名詞目的格・再帰用法←jou kwyt 再帰動詞)。人称代名詞主・目的格と所有代名詞を合わせてオランダ語と比較すると，次のようになる。なお，アフリカーンス語には再帰代名詞 (オ zich/ド sich) がなく，人称代名詞目的格を充当する。

(12) 複数：主格	目的格	所有代名詞		主格	目的格	所有代名詞
1 人称 ア ons	ons	ons	↔ オ	wij ― we	ons	両性 onze/中性 ons
2 人称 julle	julle	julle		jullie ― je	jullie ― je	jullie ― je
3 人称 hulle	hulle	hulle		zij ― ze	hun/hen ― ze	hun

主格 ons「私たち」は目的格 ons (オ ons/ド uns/英 us) の侵入である (主格 ye)。オランダ語ゼーラント方言 (オ Zeeuws) や西フランドル方言 (オ Westvlaams) でもそうであり (Howe 1996: 235)，英 you も目的格由来である。英語でも，イングランド南西部デヴォン州 (英 Devon) の南デヴォン地方 (英 South Devon) の方言に例があり (***Us***'ll go. = 英 ***We***'ll go. Trudgill 1999[2]: 98)，ノルウェー中部のノルウェー語方言も主格は oss である (**図表 1** 参照)。オランダ語ホラント方言 (オ Hollands) には，17 世紀に非公式の強調形 ons があり (比較：英 ***Me***, too.)，弱形を嫌うアフリカーンス語に適合したとも言われている (Howe 1996: 235)。

ア julle「君たち」は，オ jullie (＜je 君＋lie(den) 人々，Donaldson 1983: 171) と同類の複合語である。ア hulle「彼 (女)/それら」(＜hunlui, lui 人々) もオランダ語の口語 (hullie＜hunlieden) に見られ，hu- は ons と同じ目的格

図表１　ノルウェー語方言の１人称代名詞複数主格形



（Torp/Dahl 1996[2]：164 変更）

（オ hun）である（Ponelis 1993: 195, Raidt 1983: 136）。かつての主格（ｱﾌ sulle＜sylui, ｱﾌ sy−＝オ zij（ド sie））と所有格（ｱﾌ haarle）も 20 世紀まで例証されている（Ponelis 1993: 219f, Howe 1996: 235–237）。フリジア語群でも，西ﾌ jimme/モ・ﾌｪ jam「君たち」は -men「人々」との複合語である（Tiersma 1999[2]: 58）。

2．再帰代名詞

2-1．再帰代名詞の語形―無性代名詞としての 3 人称代名詞

再帰代名詞は語頭音 s-（オ/イ z-[z]）が目印の「s-系列」に属し，主格を欠き，性・数の区別がなく，３人称に限られるのが原則である。話者と聞き手を指す１・２人称と違って，森羅万象に及ぶ３人称では，主語との一致の有無を再帰代名詞と人称代名詞で折半して表示する。

しかし，次に示すように，実際はもっと複雑である。「（自分の）体を洗う」の例を挙げて，対照させてみよう。

(13) 英	ド	西フ	イ
I wash ***myself***.	Ich wasche ***mich***.	Ik waskje ***my***.	Ik vash ***zikh***.
You wash ***yourself***.	Du wäschst ***dich***.	(Do) waskest ***dy***.	Du vashst ***zikh***.
	Sie waschen ***sich***.	Jo waskje ***jo***.	Ir vasht ***zikh***.
He washes ***himself***.	Er wäscht ***sich***.	Hy wasket ***him***.	Er vasht ***zikh***.
We wash ***ourselves***.	Wir waschen ***uns***.	Wy waskje ***ús***.	Mir vashn ***zikh***.
You wash ***yourselves***.	Ihr wascht ***euch***.	Jimme waskje ***jimme***.	Ir vasht ***zikh***.
They wash ***themselves***.	Sie waschen ***sich***.	Sy/Hja waskje ***har(ren)***.	Zey vashn ***zikh***.

「北海ゲルマン語的特徴」の一環として，すでに古英語の時代から再帰代名詞を失っていた英語は，すべての人称と数で「人称代名詞＋-self/-selves」として，再帰代名詞を二次的に補充している。一方，イディッシュ語の再帰代名詞 zikh（ドsich）は，すべての人称と数に用いる。これはスラブ語に属するロシア語の sebja（себя）やポーランド語の się（ともに対格）と共通である[11]。

[11] テル・アヴィヴ大学のヴェクスラー（Paul Wexler 1991）による「イディッシュ語はスラヴ語起源である」とする大胆な仮説とも関連している（清水 2012a: 127–129）。

これに対して，フリジア語群には，英語と同様に「北海ゲルマン語的特徴」の一環として，古フリジア語の時代から再帰代名詞がない。（13）の西フリジア語の例が示すように，英語と違って二次的派生もしなかった。ただし，北フリジア語ハリゲン方言には，３人称主語（男 hii/女 ju/中 dat/複 jä（ド er/sie/es/sie））に対する再帰用法で，人称代名詞 ham/här/ham/jam と再帰代名詞 sik が併存している（Wilts 1997: 21）。Lorenzen（1982: 21）の文法書は，ﾊﾘ {Hii/Ju/Dat} froit {***ham/här/ham***}.「彼（女）/それは喜ぶ」/Jä froie ***jam***.「彼（女）らは喜ぶ」（←ham froie 喜ぶ，ド sich freuen）と記述し，「sik は低地ドイツ語である！」（ド *sik* ist plattdeutsch!）と力説している。それほど低地ドイツ語の影響力が強かったのだろう。

北海ゲルマン語に隣接する古オランダ語にも再帰代名詞はなく，高地ドイツ語の zi***ch*** を借用して，16 世紀以降に広まった（Donaldson 1983: 172）。-ch [x]＜-k という「第２次子音推移」（secon consonant shift，高地ドイツ語子音推移（High German consonant shift））を経ており，いかにも非オランダ語的である。低地ドイツ語のザ・メ si***k*** は，由緒正しく -k に置き換えて取り入れた結果である。アフリカーンス語は人称代名詞で代用するが，英語の影響で -self を付加した語形も増えている（ｱﾌ Hy was ***hom/homself***. 彼は体を洗う ↔オ Hij wast ***zich***./西ﾌ Hy wasket ***him***./英 He washes ***himself***.）。

ただし，３人称複数（ド sie）を転用した（14）①ドイツ語の Sie「あなた（がた）」は，上記の原則から除かれる（ド 再帰 sich↔非再帰 Sie/Ihnen）。これに対して，②デンマーク語，③ブークモール，④ニューノシュクは，同じく３人称複数（デ・ブ・ﾆｭ de ―目的格 デ・ブ dem/ﾆｭ dykk）から転じた敬称 De「あなた（がた）」（使用は稀（まれ））には，再帰用法で人称代名詞（デ・ブ Dem/ﾆｭ Dykk）を使う点で異なる。

（14）① ド Denken {***Sie/sie***} an ***sich***? {あなた（がた）（Sie）/彼（女）ら（sie）} は自分のこと（sich）を考えているのですか

② デ ***De*** bør skynde ***Dem*** hjem, frue. あなたは（De）急いで帰宅する（家へ（hjem）急ぐ（skynde Dem←skynde sig））べきですよ

（bør），奥さん（frue）

↔ ***De*** forsøgte at forsvare ***sig***. 彼らは（de）自衛し（at forsvare sig）ようとした（forsøgte）（Lundskær-Nielsen/Holmes（eds.）2010[2]: 184, 186）

③ ブ ***De*** har penger på ***Dem***. あなた（がた）は（De）自分の手元に（på Dem）お金を（penger）持ち合わせている（har）（Berulfsen 1985[5]: 43）

↔ ***De*** har penger på ***seg***. 彼（女）らは（de）自分の手元に（på seg）お金を持ち合わせている （ib. 43）

④ ニュ ***De*** vaskar ***Dykk***. ↔ ***Dei*** vaskar ***seg***. あなた（がた）（De）/彼（女）らは（dei）自分の体を（Dykk/seg）洗う（vaskar）（Hallaråker 1983: 43）

古ゲルマン諸語で再帰代名詞の語形を対格・与格・属格ですべて備えていたのは，ゴート語と古ノルド語だけである。古高ドイツ語では，属格 sīn が単数男・中性に限られていた。

（15）① 古語：対格―与格―属格：ゴ sik ― sis ― seina　古ノ sik ― sér ― sín
古高ド sih ― Ø ― sīn（単数男・中性のみ）

② 現代語：対格―与格―属格：ア/フェ sig/seg ― sér/sær ― sín/sín

↔ 対・与格：ド sich/ル sech/チュ si（ch）/ベ sich, sech
目的格：ス・デ sig/ブ・ニュ seg/オ zich/低ザ・メ sik
すべての人称・数：イ zikh/英 人称代名詞＋-self/-selves

現代ゲルマン諸語では，アイスランド語とフェーロー語が「対格 sig/seg↔与格 sér/sær↔属格 sín」を区別する。アイスランド語の例を（16）に示してみよう（ア þvo ***sig***（自分の）体を洗う（対格），greiða ***sér***（自分の）髪をとかす（与格），skammast ***sín*** 恥じる（属格））。

(16) ア		体を洗う	髪をとかす	恥じる
単数 1 人称	ég	þvæ ***mig***	greiði ***mér***	skammast ***mín***
2 人称	þú	þvær ***þig***	greiðir ***þér***	skammast ***þín***
3 人称	hann/hún/það	þvær ***sig***	greiðir ***sér***	skammast ***sín***
複数 1 人称	við	þvoum ***okkur***	greiðum ***okkur***	skömmumst ***okkar***
2 人称	þið	þvoið ***ykkur***	greiðið ***ykkur***	skammist ***ykkar***
3 人称	þeir/þær/þau	þvo ***sig***	greiða ***sér***	skammast ***sín***

大陸北ゲルマン語には対格（ス・デ sig/ブ・ニュ seg）が残った。ドイツ語の sich も与格にも使う対格である。中高ドイツ語では，「対格 sich↔与格：男・中 im(e)/女 ir(e)/複 in（＞ド ihm/ihr/ihnen）」のように，与格に人称代名詞を使った（中高ド Er bat ***im*** trinken bringen. 彼は自分に（im）飲み物を持って来させた（＝持って来るように頼んだ）（*Tristan* 11666））。与格に対格 sich を転用したのは，16 世紀半ばのことである（Dal/Eroms 2014[4]: 78）。ド ihm/ihr/ihnen の再帰用法は長く続き，19 世紀にもメーリケ（Eduard Mörike 1804–1875）の詩『ランプに寄す』（ド *Auf eine Lampe* 1846）の有名な最終行には，ド Was aber schön ist, selig scheint es ***in ihm*** selbst.「美しいものはしかし，自らの内に（in ihm selbst, 現在では in sich selbst）浄福に輝く」とある。上部ドイツ語の一部では，人称代名詞与格 eam（ド ihm）を再帰用法に充当し，低地ドイツ語ヴェストファーレン方言の一部の地域では，1 / 2 人称代名詞与格 mir/dir との類推から，与格 ser が発達している（清水 2021c: 38 **図表 2** 参照）。

ドイツ語の再帰代名詞属格は，再帰代名詞起源（3 参照）の男・中性 seiner（＜古高ド・中高ド sīn）と人称代名詞の女性単数・複数 ihrer からなり，所有代名詞 sein/ihr「彼・それ/彼女・それの」と同じく，再帰用法と非再帰用法が混在している。両者を区別する北ゲルマン語と比較されたい。とくに(18) では細心の注意を要する。

(17) ド Er$_i$ schämt sich ***seiner***$_{i/j}$. / Sie$_i$ schämt sich ***ihrer***$_{i/j}$. 彼は｛自分（seiner$_i$）/他人の男性（seiner$_j$）｝のことを恥じている / 彼女は｛自分（ihrer$_i$）/他人の女性（ihrer$_j$）｝のことを恥じている[12]

↔ア Hann$_i$ skammast ***sín***$_i$***/hans***$_j$. / Hún$_i$ skammast ***sín***$_i$***/hennar***$_j$. 彼は｛自分（sín$_i$）/他人の男性（hans$_j$）｝のことを恥じている / 彼女は｛自分（sinn$_i$）/他人の女性（hennar$_j$）｝のことを恥じている

(18) ド Er$_i$ liebt ***seine***$_{i/j}$ Frau. / Sie$_i$ liebt ***ihren***$_{i/j}$ Mann. 彼は｛自分の（seine$_i$）/他人の男性の（seine$_j$）｝妻を愛している / 彼女は｛自分の（ihren$_i$）/他人の女性の（ihren$_j$）｝夫を愛している

↔ア Hann$_i$ elskar konuna ***sína***$_i$***/hans***$_j$. / Hún$_i$ elskar manninn ***sinn***$_i$***/hennar***$_j$. 彼は｛自分の（sína$_i$）/他人の男性の（hans$_j$）｝妻を愛している / 彼女は｛自分の（sinn$_i$）/他人の女性の（hennar$_j$）｝夫を愛している

再帰代名詞の語尾は，基本的に 1 ・ 2 人称代名詞と同じである（対格 -k/-ch/-g ↔与格 -r）。本来の再帰代名詞は 3 人称の仲間だが，性を区別しないので，1 ・ 2 人称と同じ無性代名詞の特徴を示すのである。元来，その使用は 1 ・ 2 人称代名詞と同じ人間に限られていたと言われている（Dal/Eroms 2014[4]: 74）。あくまで推定だが，太古の 3 人称代名詞は，「s-系列」の指示代名詞に属していた再帰代名詞の前身 *se であり，発話場面内の人間を指し，「今，述べた人」の意味だったと，Seebold（1984: 79）は述べている。その後，他の「s-系列」と「t-系列」（＞th/þ/d/t-系列）の指示代名詞が発達する中で，既出の対象を再現する機能に限定され，文中の主語の照応機能を担うようになり，現在の再帰代名詞に至ったという。

[12] 再帰用法を明示するために，ド selbst「自身」を付加することもある。ド Er$_i$/Sie$_i$ schämt sich ***seiner***$_i$***/ihrer***$_i$ ***selbst***. 彼/彼女は自分自身のことを恥じている。

2–2. 長距離再帰

英語などの二次的派生を除けば，一般に再帰代名詞には，性・数が指定されない。そこで，両者の素性を特定する先行詞が必要である。その最小領域は等位接続を除く単文または名詞句だが，話者の視点，「埋め込み文」（embedded sentence）を導く「母型文」（matrix sentence）の動詞（母型動詞 matrix verb）の意味，それに埋め込み文の動詞のムード（法 mood）などの要因も関係して，より大きな領域に及ぶことがある（Harbert 2007: 204–213）。従属文などの境界を越えて，埋め込み文の再帰代名詞が母型文の主語との同一指示を示す現象が「長距離再帰」（long distance reflexivization）または「長距離照応/束縛」（long distance anaphora/binding）である。その好例はアイスランド語とフェーロー語に見られる。フェーロー語の例を次に示す。

（19） フェ ① ***Marjun***$_i$ sigur, [at ***Jógvan***$_j$ elskar ***seg***$_{i/j}$]. マリユン（女名）はイェグヴァン（男名）が自分（seg$_{i/j}$ マリユン/イェグヴァン）を愛していると言っている （Petersen/Adams 2009: 111f.）

② ***Marjun***$_i$ sigur, [at ***Jógvan***$_j$ elskar {****seg sjálva***$_i$/***seg sjálvan***$_j$}]. マリユンはイェグヴァンが自分自身（seg sjálvan 男性：イェグヴァン）を愛していると言っている（*seg sjálva 女性：マリユンは不可） （ib. 111）

①seg は「単純再帰形」（simple reflexive）で，従属文の主語イェグヴァン以外に，文境界を越えて主文の主語マリユンを示すこともできる。マリユンを指す後者が長距離再帰である。一方，②seg sjálva（女性）/sjálvan（男性）は，「自身」（英 self/ドselbst）にあたる語を添えて強調や対比を表す「複合再帰形」（complex/compound reflexive）である。これは一般に長距離再帰には使えず，同一文内で「局所的束縛」（locally bound）の扱いを受けると言われている（「ピカの一般化」（Pica's generalization），Ferraresi 2005: 90，ただし，（25）の例外を参照）。

埋め込み文中の再帰代名詞（seg，ドsich）は母型文の主語の視点に立った

場合に用い，そうでなければ人称代名詞（(20) hana，ドsie）も可能である。これはアイスランド語でも同様である。この点で，両言語の再帰形は日本語の「自分」と似ている。

(20) フェ ***Hon***$_i$ sigur[at eg havi svikið {***seg***$_i$/***hana***$_i$/***hana***$_j$}]. 彼女（hon$_i$）は私が（eg）{自分（seg$_i$ 彼女）/彼女（hana$_i$）/別の彼女（hana$_j$）}をだました（havi～svikið）と（at）言っている（sigur）
（Thráinsson et al. 2004: 334）

複合再帰形は，(19) elska「愛する」や (21)①sláa「なぐる」のように，普通は非再帰的に使うことが多い他動詞の再帰用法に用いる。(20)②stoyta seg「潜る」のように，他動詞の用法を欠く本来的な再帰動詞には使えない。

(21) フェ ① Jógvan$_i$ sló {****seg***$_i$/***seg sjálvan***$_i$}. イェグヴァンは自分を（seg sjálvan$_i$）なぐった（sló←sláa） （Thráinsson et al. 2004: 329）
② Hvalurinn$_i$ stoytti {***seg***$_i$/****seg sjálvan***$_i$} í kav. クジラは（hvalurinn$_i$）深みに（í kav）潜った（stoytti seg$_i$←stoyta seg）
（ib. 330）

不定詞句や分詞句の境界を越える長距離再帰でも同様である。(22) では人称代名詞 honum「彼」も使える（フェ raka＋与格「～の髭（ひげ）をそる」↔ア raka＋対格）。

(22) フェ Jógvan$_i$ bað meg [raka {***sær***$_i$/****sær sjálvum***$_i$/***honum***$_{i/j}$}]. イェグヴァンは私に（meg）{自分（イェグヴァン sær）/彼（イェグヴァン honum$_i$）/別の男性（honum$_j$）} の髭をそるように（raka）頼んだ（bað） （Thráinsson et al. 2004: 332 変更）

この現象は大陸北ゲルマン語でも観察される。しかし，従属文をまたぐ例

は正式には認められない。とくにデンマーク語（23）とスウェーデン語では厳しいとされる。一方，ブークモールとニューノシュク（24）には用例が散見される（Faarlund 2019: 298f.）。ただし，人称代名詞が優先されることに変わりはない。なお，関係文では，デンマーク語やスウェーデン語（25）についても非公式の話し言葉で許容されるようである（Faarlund 2019: 300）。とくに（25）のデンマーク語の sig selv「自分自身」は，（19）②の説明で述べたとおり，長距離再帰では不可とされるはずの複合再帰形である。

（23）　デ　***Marie***$_i$ siger, [at du elsker　{****sig***$_i$***/hende***$_{i/j}$}]. マリーは君が（du）{彼女（マリー hende$_i$）/別の彼女（hende$_j$）} を愛している（elsker）と（at）言っている（siger）　（Thráinsson et al. 2004: 331）

（24）　ブ　***Hun***$_i$ føler [at noe mangler i livet ***sitt***$_i$]. 彼女は（hun$_i$）何かが自分の（sitt$_i$）人生に（i livet）欠けている（mangler）と（at）感じている（føler）

ニュ　***Dei***$_i$ ventar på [at nokon skal gjere jobben for ***seg***$_i$]. 彼らは（dei$_i$）だれかが（nokon）自分のために（for seg$_i$）その仕事を（jobben）してくれる（gjere）のを（på at）待っている（ventar）

（Faarlund 2019: 298）

（25）　デ　Hun mente ***hun***$_i$ gjorde det [som var bedst for ***sig***$_i$ ***selv***]. 彼女は（hun$_i$）自分自身にとって（for sig selv$_i$）最善（bedst）だった（var）ことを（det som）した（gjorde）と思った（mente）　（ib. 300）

ス　***Han***$_i$ skulle behöva någon [som besöker ***sig***$_i$]. 彼には（han$_i$）自分を（sig$_i$）訪ねてくれる（som besöker）だれかが（någon）必要だろう（skulle behöva）　（ib. 300）

古ゲルマン諸語については，たとえばゴート語には，不定詞句（26），それに他の古語にはない特筆すべき現象として分詞句（27）に関して，上記に準じた例が認められる。しかし，従属文（28）の対応例はないようである（Ferraresi 2005: 90–97, Miller 2019: 383）。

(26) ゴ jah **pro**$_i$ gewaúrhta twalif$_j$ [**PRO**$_j$ du wisan miþ ***sis***$_i$]. そして（jah）彼は（pro$_i$）12 人に（twalif$_j$）自分（sis$_i$）とともに（miþ）居るように（PRO$_j$ wisan 不定詞）した（gawaúrhta）

（*Mark* 3: 14, Ferraresi 2005: 91, 93 変更）

þaiei$_i$ qēmun [**PRO**$_i$ hausjan imma jah hailjan ***sik***$_i$ saúhtē ***seinaizō***$_i$] 彼（の言うこと）を（imma）聞こうとし（hausjan），そして（jah）自分たちの（seinaizō$_i$）病気から（saúhtē）治ろうという（hailjan sik*i* 不定詞）人々が（þaiei$_i$）来ていた（qēmun）

（*Luke* 6: 18, ib. 92）

(27) ゴ ***is***$_i$ qaþuþ-þan jah þamma ***haitandin***$_j$ ***sik***$_i$ 彼（＝イエス）は（is$_i$）そして（-uh）それから（-þan）また（jah）自分を（sik$_i$）招いた人に（þamma haitandin$_j$ 現在分詞←haitan 招く）言われた（qaþ-）

（*Luke* 14: 12, ib. 93）

þanuh qaþ ***Iēsus***$_i$ [du þaim galaubjandam ***sis***$_i$ ***Iudaium***$_j$] すると（þanuh）イエスは（Iēsus$_i$）自分を（sis$_i$）信じている（galaubjandam 現在分詞←galaubjan 信じる）ユダヤ人たちに（Iudaium$_j$）言われた（qaþ） （*John* 8: 31, ib. 93）

(28) ゴ jah bēdun ina [ei uslaubidēdi ***im***/****sis***[13] in þō galeiþan] そして（jah）[彼ら（＝悪霊たち）は] その中へ（in þō）入ることを（galeiþan）彼らに（im/*sis）許すように（uslaubidēdi 希求法過去 3 人称単数）と（ei）彼（＝イエス）に（ina）頼んだ（bēdun）

（*Luke* 8: 32, Miller 2019: 383 変更）

jah faúrbauþ im [ei mannhun ni qēþeina bi ***ina***/****sik***] そして（jah）[彼（＝イエス）は]自分のことについて（bi ina/*sik）だれにも言わない（mannhun ni qēþeina 希求法過去 3 人称複数）よう

[13] 古語の用例を挙げる際の慣例に反して，Miller（2019: 383）はあえて非文（*）の判定を下している。Ferraresi（2005: 91）も同じ例を挙げているが，*sik という記載はしていない。次例も同様。

に（ei）禁じた（faúrbauþ）　　（*Mark* 8: 30, ib. 383 変更）

ゲルマン諸語の再帰代名詞は，再帰と受動の意味を兼ねた印欧祖語の「中動態」（medio-passive）を受動態として引き継いだゲルマン祖語以降，再帰の機能を補う機能語として発達した。北ゲルマン語では，(16) ア skamma***st***「恥をかく」のように，10 世紀以降（Haugen 1982: 134），動詞の屈折語尾（古西ノ -st/古東ノ -s＜-sk＜sik）への文法化も起こっている。

3．所有代名詞―属格と形容詞の間

3-1. 所有代名詞と人称代名詞属格

現代ドイツ語の所有代名詞は，①-n と②-r で終わる語形から成っている。一方，古高ドイツ語では，後者は②-ēr と③母音 -a/-o で終わる語形に分かれていた。

(29)　所有代名詞

ド　① mei***n***/dei***n***/sei***n*** 私/君/彼・それ（男・中性単数）の
　　↔ ② ih***r***/unse***r***/eue***r***/ih***r*** 彼女・それ（女性単数）/私たち/君たち/彼（女）ら・それら（複数）の

中高ド ① mī***n***/dī***n***/sī***n*** 同上 ↔ ② i***r***/uns***er***/iuw***er***/***ír*** 同上

古高ド ① mī***n***/dī***n***/sī***n*** 同上 ↔ ② uns***ēr***/iuw***ēr*** 私たち/君たちの
　　↔ ③ i***ra***/i***ro*** 彼女・それ（女性単数）/彼（女）ら・それら（複数）の

ド sein「彼・それの」は再帰形が起源であることは，2-1 で述べた。古高ドイツ語では，男・中性にその sīn（＜ド sein）が侵入し，1 / 2 人称の無性代名詞とともに，古高ド ①mī***n***/dī***n***/sī***n***「私/君/彼・それの（男・中性単数）」のグループを構成していた。かたや古ザクセン語には，再帰形起源の sī***n*** の侵入に加えて，古高ド i***ro***「彼女・それ/彼（女）・それらの」と同じく，英 his にあたる 3 人称代名詞属格（1-1（1）参照）を転用した無変化の is（←hĕ/hĭ）

が残った。これに対して，1 / 2 人称複数は，古高ド ②uns***ēr***/iuw***ēr***「私たち/君たちの」という別のグループだった。①②の両者は形容詞強変化したが，古高ド ③i***ra***/i***ro***「彼女・それ（女性単数）/彼（女）・それら（複数）の」は無変化だった。なぜなら古高ドイツ語では，この場合に所有代名詞がなく，3 人称代名詞属格を転用して補ったからである。これを受け継いだ中高ド ②i***r***/i***r***（＞ド ih***r***/ ih***r***）は，属格から脱皮して形容詞強変化するようになり，今ではすべての語形に及んでいる。

一方，人称代名詞属格は無変化である。それに，動詞・形容詞・前置詞の目的語としてはたらき，所有代名詞とは意味・用法がまったく異なる（ド Erbarme dich ***meiner***, o Gott! ああ神よ，私を憐れんでください/Sie ist ***seiner*** überdrüssig geworden. 彼女は彼がいやになった/statt ***deiner*** 君の代わりに）。それでも，次に示す人称代名詞属格は，語末に -er がつかない古語では，所有代名詞と語形がかなり似ていた。

（30） 人称代名詞属格

ド　単数：mein***er***/dein***er***/sein***er***（男・中性）ihr***er***
　　複数：uns***er***/eur***er***/ihr***er***（＞Ihr***er***）
中高ド 単数：mīn/dīn/es, sīn/ir（e）　複数：uns***er***/iuw***er***/ir（e）
古高ド 単数：mīn/dīn/sīn/ira/es　複数：uns***ēr***/iuw***ēr***/iro

現代語の人称代名詞属格の語末に共通する -er は，uns***er***/eu***er***「私たち/君たちの」の古形の一般化による（Tiesema 1969[2]: 94）。16 世紀に始まり，19 世紀に広まった（Paul 2002[10]: 214）。属格：中高ド es（↔ez 主格）は廃れている。ド Vergiss***mein***nicht「忘れな草」（私を（-mein-＜中高ド mīn）忘れないで）は以前のなごりである。よく知られた文学作品の例を挙げると，ゲーテの名詩『恋人の傍らで』（ド *Nähe des Geliebten* 1795）の冒頭には，ド ***Ich denke dein***, wenn mir der Sonne Schimmer / Vom Meere strahlt; / ***Ich denke dein***, wenn sich des Mondes Flimmer / in Quellen malt.「あなたを想います　日の光が海から輝き渡るとき　あなたを想います　月のきらめきが

泉に照り映えるとき」（現在は ich denke an dich）という属格 dein（deiner の古形）の語形がまだ見られる。2-1 で引用した 1846 年のメーリケの詩『ランプに寄す』の直前の行にも，ド Ein Kunstgebild der echten Art. Wer achtet ***sein***?「真の芸術作品　だれがおまえに目を留めるというのか」（現在は Wer achtet darauf?）に属格 sein（seiner の古形）の語形がある。

古ゲルマン語で最も古形を豊富にとどめるゴート語では，１・２人称は所有代名詞（形容詞強変化）と人称代名詞属格（無変化）が別形である。ゴ unsar「私たちの」/izwar「君たちの」/igqar「君たち２人の」には，男性単数主格語尾 -s が欠けているが，これは -sar/-war/-qar が短語幹（-VC）であることによる。ゴ meins「私の」/þeins「君の」，それに②の seins「自分の」は長語幹（-VVC）なので，語尾 -s を伴う。一方，３人称は「所有代名詞（再帰・形容詞強変化）↔人称代名詞属格（非再帰・無変化）」の対立を保っている。

(31)　① １・２人称：ゴ
所有代名詞（形容詞強変化）：meins/þeins/unsar/複数 izwar/双数 igqar
↔人称代名詞属格（無変化）：meina/þeina/複数 unsara/双数 izwara
② ３人称：ゴ
所有代名詞（再帰・形容詞強変化）：seins 自分の
↔人称代名詞属格（非再帰・無変化）：男・中性単数 is/複数 izē，女性単数 izōs/複数 izō

両者の関係については諸説あるが（Seebold 1984: 47–56, Fulk 2018: 189），有力な説では，そのルーツは所有代名詞は所有を表す形容詞語幹で，それが属格に転用されたようである（Ringe 2017[2]: 236, Gerdes/ Spellerberg 1986[6]: 65, Tiesema 1969[2]: 95）。また，(29)① -n のグループは「人称代名詞所格（locative）＋形容詞派生接尾辞：印欧 *-no-」に由来し，「私/君/自分（＞彼・それ）のもとに」＞「～に属して」＞「～の」と意味変化した結果とされてい

る。(29)② -ēr のグループは「人称代名詞語幹＋比較・対立の接尾辞：印欧 *-ero-」が起源で,「(君たちに対する) 私たちの/(私たちに対する) 君たちの」の意味だったらしい[14] (Krahe/Meid 1969[7]: 59f.)。

3-2. 北ゲルマン語の所有代名詞と人称代名詞属格

ドイツ語では，ルーツが似通った「①所有代名詞（形容詞強変化）↔②人称代名詞属格（無変化）」の区別が「所有（～の[もの]）↔動詞・形容詞・前置詞の目的語」という意味・用法の差に反映している。これに対して，北ゲルマン語では，両者が「所有（～の[もの]）」の意味を折半している。

(32) ① 所有代名詞（単・複数：男/女/中性・主格）
　　↔② 人称代名詞属格（無変化）

ア ① 単数：男性 bíllinn {***minn/þinn/sinn***} {私/君/自分（再帰）} の車
　　女性 bókin {***mín/þín sín***} {私/君/自分（再帰）} の本
　　中性 húsið {***mitt/þitt/sitt***} {私/君/自分（再帰）} の家
　　複数：男性 bílarnir {***mínir/þínir/sínir***} 同上
　　女性 bækurnar {***mínar/þínar/sínar***} 同上
　　中性 húsin {***mín/þín/sín***} 同上
　② 単数：無変化 {bíllinn/bókin/húsið} {***hans/hennar/okkar/ykkar/þeirra***} {彼（非再帰）/彼女（非再帰）/私たち/君たち/彼(女)たち（非再帰）} の {車/本/家}
　　複数：無変化 {bílarnir/bækurnar/húsin} {***hans/hennar/okkar/ykkar/þeirra***} 同上

[14] 同類の接尾辞：印欧 *-tero- によるラ nos***ter**/ves***ter**「私たち/君たちの」，dex***ter***/sinis***ter**「右/左の」参照。印欧 *-ero- を場所の副詞を派生した接尾辞 *-er- に関係づける説もある（Fulk 2018: 189)。

(33) ① 所有代名詞（単数：両/中性—複数：統一性）
↔② 人称代名詞所有格（無変化）

ス ① 単数：両性 {***min/din/sin/vår/er***} {bil/bok} {私/君/自分（再帰）/私たち/君たちの {車/本}
中性 {***mitt/ditt/sitt/vårt/ert***} hus {私/君/自分（再帰）/私たち/君たち} の家
複数 統一性 {***mina/dina/sina/våra/era***} {bilar/böcker/hus} 同上
② 単数：無変化 {***hans/hennes/deras***} {bil/bok/hus} {彼（非再帰）/彼女（非再帰）/彼(女）たち（非再帰）} の {車/本/家}
複数：無変化 {***hans/hennes/deras***} {bilar/böcker/hus} 同上

(32) のアイスランド語の例で確認すると，① -n で終わり，形容詞強変化する所有代名詞 minn/þinn/sinn「私/君/自分（再帰）の」と② -s/-r(a) で終わる無変化の人称代名詞属格 hans/hennar/okkar/ykkar/þeirra「彼/彼女（非再帰）私たち/君たち/彼(女）たちの（非再帰）」に分かれる。(18) で言及した「ア konan ***sín*** 正妻（再帰）↔konan ***hans*** 人妻（非再帰）」という意味の違いも，明確に峻別できる。かつての属格の用法をかなりとどめているアイスランド語では，Ég get ekki lifað án {***þín/hennar***}.「ぼくは君/彼女なしでは生きていけない」という þú/hún「君/彼女」の属格を使った表現も可能である。ただし，ア A og B「A と B」の等位接続では，再帰形 B は A を指せない。したがって，ア ***Jón$_i$ og konan hans$_{*i/j}$/*sín$_{i/j}$*** eru heima.「ヨウンと彼の（hans，ヨウン以外の男性の）妻は家にいる」では，依然として気が抜けない。同じく離島北ゲルマン語に属するフェーロー語も，目的語としての属格の用法をかなり失った点を除けば，アイスランド語と同じ分布を示す。

②ア okkar/ykkar「私たち/君たちの」は古ノルド語の双数 okkarr/ykkarr の転用であり，語尾 -r（男性単数主格）が示すように，形容詞強変化していた。本来の複数形は (33) のスウェーデン語の例など，大陸北ゲルマン語に残っている（ス 単数両性 vår/中性 vårt/複数 våra 私たちの，er/ert/era 君たちの↔デ jeres，2 人称代名詞 I の属格)。これは古ノルド語でも形容詞強

変化する所有代名詞だったが（古ノ 単数男性 várr/女性 vár/中性 várt/複数 várir/várar/vár; 単数 yð(v)arr/yður/yð(v)art/複数 yðrir/yðrar/yður），アイスランド語では無変化になり，以前の双数形（古ノ okkarr/ykkarr）とともに属格（ア okkar/ykkar）と同形になった（森田 2002[3]: 78–80）。再帰形 sinn（古高ドsīn）が 3 人称代名詞属格に侵入しなかった点と合わせて，ドイツ語との大きな違いであると言える。

参考文献

Berulfsen, Bjarne (1985[5]) *Norwegian Grammar*. Oslo: Aschehoug (Nygaard).

Borchert, Mina/Århammar, Nils/Århammar, Ritva (1987) *Wi lear Halunder*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.

Boutkan, Dirk (2001) Morphology of Old Frisian. In: Munske (Hrsg.) 620–626.

Dal, Ingerid/Eroms, Werner (2014[4]) *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Berlin/Boston: De Gruyter.

Donaldson, B. C. (1983) *Dutch. A Linguistic History of Holland and Belgium*. Leiden: Nijhoff.

Faarlund, Jan Terje (2019) *The Syntax of Mainland Scandinavian*. Oxford: Oxford University Press.

Ferraresi, Gisella (2005) *Word Order and Phrase Structure in Gothic*. Leuven/Paris/Dudley: Peeters.

Frings, Theodor/Lerchner, Gotthard (1966) *Niederländisch und Niederdeutsch*. Berlin: Akademie-Verlag.

Fulk, R. D. (2018) *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.

Gerdes, Udo/Spellerberg, Gerhard (1986[6]) *Althochdeutsch — Mittelhochdeutsch*. Frankfurt am Main: Athenäum.

Hallaråker, Peter (1983) *Norwegian/Nynorsk*. Bergen/Oslo/Stavanger/Tromsø: Universitetsforlaget.

Harbert, Wayne (2007) *The Germanic Languages*. Cambridge: Cambdridge University Press.

Haugen, Einar (1982) *Scandinavian Language Structures*. Tübingen: Niemeyer.

Howe, Stephen (1996) *The Personal Pronouns in the Germanic Languages. A Study of Personal Pronoun Morphology and Change in the Germanic Languages from the First*

Records to the Present Day. Berlin/New York: De Gruyter.
風間喜代三（1998）『ラテン語とギリシア語』三省堂
König, Werner（1998[12]）*dtv-Atlas Deutsche Sprache*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
Krahe, Hans/Meid, Wolfgang（1969[7]b）*Germanische Sprachwissenschaft II. Formenlehre*. Berlin: De Gruyter.
Kramer, P.（1982）*Kute Seelter Sproakleere*. Rhauderfehn: Ostendorp.
Lass, Roger（2006）Phonology and Morphology. In: Hogg, Richard/Denison, David（eds.）*A History of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press. 43–108.
Lorenzen, Jens（1982）*Halligfriesische Sprachlehre*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
Miller, D. Gary（2019）*The Oxford Gothic Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
森田貞雄（2002[3]）『アイスランド語文法』大学書林
Munske, Horst Haider（Hrsg.）（2001）*Handbuch des Friesischen/Handbook of Frisian Studies*. Tübingen: Niemeyer.
Orel, Vladimir（2003）*A Handbook of Germanic Etymology*. Leiden/Boston: Brill.
Paul, Hermann（2002[10]）*Deutsches Wörterbuch*. Tübingen: Niemeyer.
Petersen, Adeline（2007）*Friesischer Sprachkurs. Mooringer Frasch*. Bräist/Bredstedt: Nordfriisk Instituut.
Petersen, Hjalmar P./Adams, Jonathan（2009[2]）*Faroese*. Tórshavn: Stiðin.
Ponelis, Fritz（1993）*The Development of Afrikaans*. Frankfurt am Main et al.: Lang.
Prokosch, Eduard（1939）*A Comparative Germanic Grammar*. Philadelphia: Linguistic Society of America/University of Pennsylvania.
Raidt, Edith H.（1983）*Einführung in Geschichte und Struktur des Afrikaans*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
Ramat, Paolo（1981）*Einführung in das Germanische*. Tübingen: Niemeyer.
Ringe, Don（2017[2]）*From Proto-Indo-European to Proto-Germanic*. Oxford: Oxford University Press.
Seebold, Elmar（1984）*Das System der Personalpronomina in den frühgermanischen Sprachen. Sein Aufbau und seine Herkunft*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
清水　誠（1992）「北フリジア語モーリング方言（1）．文法．V. Tams Jörgensen: *Kort spräkeliir foon dåt mooringer frasch* 訳注」『北海道大学文学部紀要』40–3．65–162.
清水　誠（2006）『西フリジア語文法―現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会
清水　誠（2019）「ドイツ語から見たゲルマン語―名詞の性，格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158 号．37–76.
清水　誠（2020）「ドイツ語から見たゲルマン語（2）―属格と所有表現」『北海道大学文学

研究院紀要』160 号．37–96.
清水　誠（2021a）「ドイツ語から見たゲルマン語（3）―名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162 号．35–101.
清水　誠（2021b）「ドイツ語から見たゲルマン語（4）―冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163 号．1–22.
清水　誠（2021c）「ドイツ語から見たゲルマン語（5）―人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』164 号．19–41.
Sjölin, Bo（1969）*Einführung in das Friesische*. Stuttgart: Metzler.
寺澤芳雄（編）（1997）『英語語源辞典』研究社
Thráinsson, Höskuldur（2007）*The Syntax of Icelandic*. Cambridge: Cambridge University Press.
Thráinsson, Höskuldur/Petersen, Hjalmar P./Jacobsen, Jógvan í Lon/Hansen, Zakaris Svabo 2004 *Faroese*. Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag.
Tiersma, Pieter Meijes（1999[2]）*Frisian Reference Grammar*. Ljouwert: Fryske Akademy.
Tiesema, H. D.（1969[2]）*Abriss der historischen Laut- und Formenlehre des Deutschen*. Vaassen: Uitgeverij Van Walraven.
Torp, Arne/Dahl, Berit Helene（1996[2]）*Språklinjer*. Oslo: Aschehoug.
Trudgill, Peter（1999[2]）*The Dialects of England*. Oxford/Malden: Blackwell.
宇賀治正朋（2000）『現代の英語学シリーズ　第 8 巻　英語史』開拓社
Vekeman, Herman/Ecke, Andreas（1992）*Geschichte der niederländischen Sprache*. Bern/Berlin/Frankfurt a.M./New York/Paris/Wien: Lang.
Walker, Alastair/Sjölin, Bo（1986）*Frasch for önjfängere. Programmierter Lehrgang des Mooringer Friesisch*. Kiel: Nordfriesische Wörterbuchstelle der Christian-Albrechts-Universität Kiel.
Wilts, Ommo（1993）*Friesische Formenlehre in Tabellen I. Wiedingharde*. Husum: Matthiesen.
Wilts, Ommo（1995a）*Friesische Formenlehre in Tabellen II. Föhr*. Husum: Matthiesen.
Wilts, Ommo（1995b）*Friesische Formenlehre in Tabellen III. Amrum*. Husum: Matthiesen.
Wilts, Ommo（1995c）*Friesische Formenlehre in Tabellen IV. Sylt*. Husum: Matthiesen.
Wilts, Ommo（1995e）*Friesische Formenlehre in Tabellen VI. Nordergoesharde*. Husum: Matthiesen.
Wilts, Ommo（1997）*Friesische Formenlehre in Tabellen VII. Halligen*. Husum: Matthiesen.